文学案内 VIII

日本の文学

久松潛一
今井源衛
高橋義孝

文学案内 8
日本の文学

定価 330 円

1962年11月26日 印刷
1962年11月30日 発行

著者 久松潜一
今井源衛
高橋義孝

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町71番地
電話東京 (341) 7111〜9番
振替東京 808番

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 新宿 加藤製本所

© 1962 Printed in Japan
乱丁、落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

序

日本文学史をかつて文学の発生、文学意識の成立、文学新生もしくは文芸復興という三つの点から跡づけたことがある。序に代えて素描をのべて見たい。

日本文学は発生以来、長い年月を経て今日に至っている。古事記が撰録された和銅五年一月からでも、千二百五十年になる。その前にもどれだけの年月を神話や伝説が語り伝えられて来たか、また歌謡がうたいつづけられて来たかはなかなかたどり難い。そういう長い年月の間に多くの作品が書かれもしくは語られて来た。文学のみならず絵画や彫刻や建築などの造形芸術も制作されている。また、文学ひろく言って芸術の形成されるには歴史社会や風土の地盤の上になされている。そうして時代の推移によって文学も変遷してゆく。そのために文学の展開を跡づけるために史的区分のなされる必要がある。これを一般の歴史や政治史、経済史の区分に従って行う場合もあり、文学自体の形態や思潮の展開にもとづいて区分する場合もある。都や幕府の所在地の変遷によってわけると大和時代、平安時代、鎌倉室町時代、江戸時代、東京時代になる。これを時間的に上代・中古・中世・近世・近代・現代とすることも出来る。最初にあげた区分は思潮からする一つの展開過程である。

上代文学は文学の発生を中心として見ることが出来る。文学の発生を感動起原説や信仰起原説その他から説明することが行われているが私は種々の起原説をそれぞれ認めたく思う。信仰の行事などは文学発生の場を表しており、感動は文学の内容を表している。そうして感動の表現によって生ずる抒情詩と信仰の儀式から生ずる叙事詩とは上代文学の二つの系列をなしているのみでなく、それ以後もこの二つの系列が貫いている。神話や伝説と万葉集とは上代文学を代表している。

上代文学においては、まだ文学意識は殆ど認め難い

が、万葉集の後期から中古の初期中期にかけて次第に文学意識が成立する。それは支那の詩経、文選や六朝詩学の移入されたことにもよるが、日本文学の自律的な展開としても当然であった。歌経標式を経て古今集になると文学意識にもとづく大和歌の復興という点が著しい。紀貫之はそれを代表しているが、このような文学意識は美的理念となり文学批評の発生を促すのである。そうして歌論書が成立し歌合が行われるようになる。もとよりまだ文学批評の基準は六朝詩学の詩病から来た歌病のような修辞論に過ぎなかったが、次第にそれらから脱却して「あはれ」や「をかし」「たけ高し」などの美的理念が批評の基準になる。それが作品の上に滲透して完成の域に達したのが源氏物語や枕草子である。それらは平安時代の貴族生活という制約のうちでなされたが日本文学の歴史の上で大きな意義を有している。しかし文学理念としての「あはれ」や「をかし」は完成するとやがて固定してくる。中古の後期文学はこのような固定を表しているが、それは藤原氏の衰退や地方における武士の興起ともなっている。

このような固定に対して古代復帰、自然への思慕、仏教信仰等によって新しい出発を求めたのが中世文学である。中世前期としての鎌倉文学は日本における第一の文学新生と言える。西行や源実朝の文学はこのような文学精神の現れである。素樸な古代の英雄精神の讃仰も起って来た。平家物語は平家の興亡盛衰を扱って英雄への讃美があり、中世の叙事詩の典型となっている。その根柢には無常感が貫いている。それは法然、親鸞、道元等による鎌倉仏教の成立と結びついている。もとより中世には中古の継承としての優雅な美的理念も持続しており、それを中世的なものと融合せしめることによって幽玄、有心の文学理念を確立せしめた。それは無常の中に永遠なものを求める精神であり、和歌、連歌、能楽などの文学芸術の上に現れているが、宗教的精神と結びついて道の自覚となっている。書道、画道、華道、茶道等の発達もこのような精神の上に形成されている。

しかしこういう中世の道の精神も窮極に達すること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

によって再び固定化を免れなかった点に中世の終焉があり、それを克服しようとしたのが日本文学史における第二の文学新生であり、近世文学の成立の過程である。安土桃山期から元祿期に至る文学はこのような文学新生もしくは文芸復興の精神が根本になって展開した。美術が安土桃山期に立派に花開いたのに比べると文学はやや遅れるが、然し文学においても俳諧、浄瑠璃、歌舞伎などの形態は安土桃山期にすでに成立している。文芸復興の精神は、古代への復帰、自然への憧憬、現実への志向が固定したものを強くゆさぶった。契沖、芭蕉、西鶴、近松が活躍した元祿文学はその頂点を示している。近世文学の後期はそれの展開し、各形態による文学作品を成立せしめるとともに固定してゆく過程である。

そうして近代文学は西欧文化の移入を契機として起った第三の文学新生である。

私はこのような構想のもとに日本文学史を扱ったこともあり、それを更に精細に考察して見たく思っている。日本文学を横に類型的に扱うことも出来るし、日本文学を比較文学の見地から考察し、世界文学の中に位置づけることも今後の課題であろう。

そうして本書は同学の人々とともに試みた日本文学史叙述の一つの試みであると言ってよい。世界文学の視野の中に日本文学を扱い、位置づけようとした 学問的な厳密を期するとともに日本文学を広く世に伝えたいという心持を以て書かれた。そうして内容の精確さとともに日本文学研究の現在到達している水準を表すために各時代文学を専攻されている少壮研究家の協力を得た。即ち左の諸氏である。

上代文学　清水克彦
中古文学　今井源衛
中世文学　島津忠夫
近世文学　松田　修
近代文学　重松泰雄

久松潜一と今井源衛氏とはそれを整理し全体としての組織をくずさないように統一的にまとめ、更に高橋義孝氏がリライトを行い、結びを書いた。それに対して更に協力者の意見によって補うということが幾度か

行われ、最後に久松が全体を通観するという手続きをとって漸く完成するに至ったのである。量から言えば大きくないが、本書のなるまでには多くの努力がなされたことだけは言える。

なお索引は編集部の手を煩した。ここに協力者に対して感謝の意を表したい。

昭和三十七年八月　　久松潜一

日本の文学　目次

序……一

第一章　『萬葉集』の抒情詩人たち……三

「初期万葉」　柿本人麻呂

『古事記』と『日本書紀』　展開期の詩人群像

大伴家持

第二章　『古今和歌集』の前後……四七

平安京と漢文学　和歌の復興　六歌仙時代

『古今和歌集』　『古今和歌集』以後

第三章　王朝の物語文学……七一

物語文学の起源

作者及び読者としての男女の相違

『源氏物語』　『枕草子』　王朝末期の物語

歴史物語と説話文学

第四章　『平家物語』の世界……九九

新古今歌風の形成　『方丈記』

『平家物語』の成立　法語・連歌・紀行文学

第五章　『徒然草』と世阿彌の美学……一三
『徒然草』と兼好法師　動乱期の文学
能楽の形成と世阿彌　東山文化
庶民文学の芽生え
第六章　芭蕉と西鶴と近松と……一四九
漂泊の詩人・芭蕉　西鶴の小説
近松の劇文学
第七章　江戸時代後期……一五
蕪村と一茶と　秋成・馬琴・戯作者たち

江戸末期の演劇界

第八章　明治文学（黎明期から末年の自然主義まで）……一九九

新文学の黎明　逍遙の小説「改良」

二葉亭四迷の理論と作品　紅葉・露伴の文学

鷗外・透谷のロマン主義

雑誌『文學界』の運動　日清戦役後の文壇

明治三十年代　自然主義文学の成立

第九章　鷗外・漱石とその周辺……二三五

鷗外の文壇復帰以後　鷗外と漱石

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

漱石文学の本質　鴎漱の周囲

第十章　大正から昭和へ……二五九

『白樺』派の文学

『奇蹟』『三田文學』『新思潮』に拠った人々

プロレタリア文学の歩み

モダニズム文学の系譜　昭和十年前後の情勢

結び……二八五

索引……三〇五

表記について

本文は原則として漢字は新字体、仮名遣いは新仮名を用いたが、古典理解の必要上から左のように配慮した。

一　人名・書名・地名・官位・元号の漢字は旧字体、但し、これらのルビは新仮名遣い。（例・「藤原」でなくて「藤原」、「ふぢはら」ではなくて「ふじわら」、『万葉集』ではなくて『萬葉集』、「まんえふしふ」ではなくて「まんようしゅう」、「天平勝宝」ではなくて「天平勝寶」）

一　引用文は適切と思われる底本をえらび、字体・仮名遣いともその原文のまま。

一　引用文中、詩歌の漢字に附したルビは旧仮名遣い。

日本の文学

文学案内　第八巻

箱・カバー文字　篠田桃紅

第一章　『萬葉集』の抒情詩人たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong